

第 2 次試験 [課題]

次の 3 つの詩文から、1 つをモチーフとして選び
あなたなりの映像を作ってください。

- ・ 青柳菜摘 「さがしもの」
- ・ 海東セラ 「外壁」
- ・ マーサ・ナカムラ 「鮎わたし」

※ 編集上の注意

- ・ 本編の長さは 3 分以内。
- ・ 冒頭に黒みと、受験番号、氏名、選んだ詩文のタイトルを入れてください。

※ 提出について

- ・ 提出方法は、個別にメールにて連絡します。
 - ※ 2月1日(水)までにメールが届かない場合は、大学院映像研究科教務係にお問い合わせください。
- ・ 映像データの他に、以下の事項を A4 用紙 1 枚に収まるよう記載した PDF (1MB 以下) を提出してください。
 - 1) 受験番号、氏名
 - 2) 制作に関わった協力者とその役割を正確に記述してください。

以上

さがしもの

軽い小さい生き物の殻

鼻息で飛ばす

床に落ちたかつてのかたちは

絨毯の模様に分れない

人間の生活に馴染めずに

絨毯の毛先からわずかに浮いている

生きているほうが場所に息づいてしまう

小さい生き物を探すには

まず自分が小さくなる

目が床に

近ければ近いほどよく

壁の上から下を沿わせる

近くに寄れば夜ほど暗くなる

スマホのライトで手前を照らすと

みえる粒子みたいな糸

それでもみつからないとき諦めて

普段の生活を

始めて引き出しからタオルを出し

お風呂を洗い濡れた足を

拭いて床についた水滴を

見下ろす

生活をしてるとき

場所の記憶をもっている

目の前にいたことに気づくまで

なにもかわらぬ生活がつづく

外壁

目は一瞬でとらえるものの、多くは肌で受け止めつつ、あってないものとして扱うことこそ快適な暮らし。広さゆえにとりかえしがつかず周辺環境からも自由でないことを知ったころには、あまたの罅割れや剝離に深部をゆがませ、もはや壁はわたくしです。その家の外壁はモルタル仕上げ。砂とセメントと水を練り合わせた素材は、色や質感を天気によって変えてみせます。ひなたの壁に頬を寄せ、体を返して抱きつくなどするうちに、艶やかな影と家が笑いながら崩れ果ててきて、細かなでこぼこなら無数にあるのです。空気をふくむ壁の時間は現実より長く、古くなるほど派生的です。およばないひろがり背にして、みずからはみずからを探しはじめます。剥きだしの肌は、ざらざら血肉の味を知り、こわばった瘡蓋をゆるめて湿り気のある傷にもどして。奥の方にはやわらかなものも金属のものも眠っています。傷はいたるところにあります、塗膜のポケットに隠された巢や、日陰に蔓延る苔について口外はしません。裏手に埋めた小鳥は壁によみがえり、雨に翼を広げます。もちろん内部だけが家ではないのです。

* 「お芝居に至る道は、時間のなかの時間を通して続いていた。昼という壁の窪み、それはすなわち午後のごとで、そこではもう、ランプの灯とおやすみなさいの匂いがしていたが、その窪みに穴が穿たれたのだった」。ヴァルター・ベンヤミンは芝居見物を許さ

れた幼年の日をこう記す。「建物を境界づけあるいは分割し、上方や横方向からの荷重を分担する機能を満たす垂直部材」(『図解すまいの寸法・計画事典』)である壁は案外時間と近い。外壁は風雨や陽光に、間仕切り壁は生活に晒されているから。

『ドールハウス』(海東セラ 著) 思潮社 所収

鮒わたし

河川敷に

ひとりの婆が住んでいて、

「鮒わたし」と言う。

その頃 私は

暗い部屋でテレビを見て

眠る老人しか知らなかったので、

濁る雲の下

足長蜘蛛のように 土手を這い回る

婆に 興味を引かれたのだった。

婆の居の前に、

両手で囲えるほどの井戸があった。

深くて底は見えないが、

婆の「鮒わたし」が、

私の心に 鮒を泳がせた。

水のはねる音が 耳から響いて

鮒、と婆が口を動かした。

婆の顔は鮒だった。

名前は、だれもつけなかった

この先も、名前はなし

気付くと 井戸も婆も消え

私の心に 井戸と鮒が住まっていた。

『狸の匣』(マーサ・ナカムラ 著) 思潮社 所収